

『万葉集』の「泣く子なす」について

保坂 秀子

ていることの意味を検証する必要があると考える。

二 上代の文獻における「泣く子」について

『万葉集』の「泣く子なす」については、すでに江見澤洋祐氏が、その表現を支えている「泣く兒」の潜在的な要素に注目して、包括的に論じている。

江見澤氏は、『古事記』『日本書紀』『日本霊異記』などの文獻から、例えばスサノオの涕泣の神話などを資料として「泣く兒」について考察し、「社会的に見て異和な、危険視されるべき存在」として捉えられていたと述べている。また、『万葉集』の「泣く子」の用例や泣いている「みどり子」の用例をあげ、「泣く兒」には「大人の理性に対する前理性、前秩序性、自らを律することのできない幼児性といった性質により喻えるもの」と「無心にうろつき回るといふ動作により喻えるもの」が確認できると述べている。こうした検討を踏まえて、江見澤氏は、『万葉集』の「泣く子なす」が修飾する語に注目して、「泣く子なす」には、「泣く兒」の古代性や表現の累積から捉え

『万葉集』の「泣く子なす」について

一 はじめに

上代の文獻において、『万葉集』のみに見られる表現の一つに「泣く子なす」というのがある。これは、「泣く子」と「なす」から構成される語であり、「なす」が「ように」という意味で用いられていることから、「泣いている子どものように」と訳出されている。また、『日本国語大辞典』（第二版）では、『万葉集』の用例をあげ、以下の語句を修飾すると説明している。

「幕ひ来」(③・四六〇) (⑤・七九四)

「音のみし泣く」(⑮・三六二七)

「言だに問はず」(⑬・三三三六)

「取り探る」(⑬・三三〇二)

このように「泣く子なす」には、修飾・被修飾の関係があることから「枕詞」ともいわれる。しかし、後に詳しく見ていくが、『万葉集』の「泣く子なす」はいずれも成人の行動を「泣く子」に喻える表現であり、成人の行動がそのように喻えられ

られる」表現と、それでは捉えきれない「へ泣く兒」とは愛らしいものとする認識のうえに立った「表現という「位相」が見られると指摘する。

このように、江見澤氏は、「へ泣く兒」を大人に対して非理性的な存在と捉えた上で、『万葉集』の「泣く子なす」について、表現上「位相」のあることを指摘するが、同時代の文献に見られる「泣く子」を検討し直すことによって、『万葉集』の「泣く子なす」は一つの表現として統一した説明ができるように思われる。というのも、『古事記』などの文献に記された泣いている子どもには、ある共通する点が見られるからである。例えば、『古事記』におけるスサノオの涕泣の挿話を見てみたい。

故、各依さし賜ひし命の隨に、知らし看す中に、速須佐之男命、命させし国を治らずて、八拳須心の前に至るまで、啼き伊佐知伎。其の泣く状は、青山は枯山の如く泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。是を以ちて悪しき神の言は、狭蠅如す皆満ち、万の物の妖悉に発りき。故、伊邪那岐大御神、速須佐之男命に詔りたまひしく、「何由かも汝は事依させし国を治らずて、哭き伊佐知流。」とのりたまひき。爾に答へ白ししく、「僕は妣の国根の堅州国に罷らむと欲ふ。故、哭くなり。」とまをしき。爾に伊邪那岐大御神、大く忿怒りて詔りたまひしく、「然らば汝は此の国に住むべからず。」とのりたまひて、乃ち神夜良比爾夜良比賜ひき。故、其の伊邪那岐大神は、淡海之多賀に坐すなり。ここで注目したいのは、スサノオの涕泣の暴力性よりも、ス

サノオが泣くことの理由を明かし、追放されるまでの経緯である。スサノオの涕泣の理由は、父親であるイザナギによって尋ねられており、これに対してスサノオは「僕は妣の国根の堅州国に罷らむと欲ふ。故、哭くなり。」と答えている。つまり、スサノオの涕泣は、母親を失った子どもと父親という特異な関係から語られている。しかも、父親であるイザナギは、亡き母親を必死に求め続けるスサノオに対して、母親の代わりにあやすこともなく「命させし国」から追放しているのである。

スサノオ以外の神や人による涕泣の挿話では、泣く理由を明記していないが、いずれの例でも母親は不在であり、母親の代わりに子どもを泣きやませようとする役割は、近親者によって担われていることが指摘されている。特に、『日本書紀』垂仁天皇二十三年九月条のホムチワケノミコや『出雲風土記』仁多郡三澤郷のアヂスキカヒコノミコトの挿話では、父親がその役割を担っているのである。

また、『万葉集』の「泣く子」の用例にも、触れておきたい。
韓衣 裾に取り付き 泣く子らを 置きてそ来ぬや 母なしにして

右の一首、国造小県郡の他田舎人大島（②④・四四〇一）当該歌は、左注によれば、防人である他田舎人大島の作である。歌中の「泣く子ら」の「子ら」は、詠み手の子どもであることが、第五句に「母なしにして」とあることからわかる。当該歌の「泣く子ら」は、父親である詠み手から詠まれており、ここでも、母親不在の子どもと父親という特異な関係から詠まれている。

父親である詠み手にとって、「子ら」の「裾に取り付き泣く」行為は、自分を行かせまいとする行為として理解されている。そのことは、詠み手が「置きてそ来ぬや」と後悔していることからわかる。しかし、もう一つ看過できないのは、この表現によって、母親の代わりとして「泣く子ら」の頼りとすべき唯一の存在であった詠み手が、「泣く子」を受け入れることなく、家郷に置いていくことである。つまり、当該歌でも、先のスサノオの挿話と同様に、「泣く子」は、失った母親を求めて泣く子どもをイメージして詠まれるとともに、その父親が母親の代わりになりきれなかったことも詠んでいるのである。

以上のことから、「泣く子」とは、言外に母親不在の子どもと父親という特異な関係を含み持ち、失った母親を求めて泣く子どものイメージに基づく表現として捉えたい。

先に述べたように、「泣く子なす」は、『古事記』や『日本書紀』といった同時代の文獻にはなく、『万葉集』に五例のみ見られる表現であり、成人の行動を「泣く子」に喩える表現である。とはいっても、それは、成人のどのようなあり様を示しているのだろうか。これまで、「泣く子なす」について、作品に即した説明はされてこなかった。そうしたことから、本稿は、「泣く子なす」をこれまで検討してきた「泣く子」のイメージから各作品に即して考察するものである。

三 卷三・四六〇番歌の「泣く子なす」について

七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願の死去しことを悲嘆し

て作る歌一首

たくづのの新羅の国ゆ 人言を 良しと聞かして 問ひ
 放くる 親族兄弟 なき国に 渡り来まして 大君の 敷
 きます国に、うちひさす 都しみに 里家は さはにあ
 れども いかさまに 思ひけめかも つれもなき 佐保の
 山辺に 泣く子なす 慕ひ来まして きたへの 家をも
 造り あらたまの 年の緒長く 住まひつつ いまししも
 のを 生ける者 死ぬといふことに 免れぬ ものにしあ
 れば 頼めりし 人のことごと 草枕 旅なる間に 佐保
 川を 朝川渡り春日野を そがひに見つつ あしひきの
 山辺をさして 夕闇と 隠りましぬれ 言はむすべ せむ
 すべ知らに たもとほり ただひとりして 白たへの 衣
 手干さず 嘆きつつ 我が泣く涙 有間山 雲居たなびき
 雨に降りきや (③・四六〇)

当該歌は、題詞によると天平七年に大伴坂上郎女が詠んだ尼理願への挽歌である。尼理願についての詳伝は不明だが、当該歌の反歌である四六一番歌の左注には、新羅から来日し、大伴安麻呂邸に寄寓していたことが記されている。

当該歌の初句から「慕ひ来まして」には、尼理願が祖国新羅から日本に渡り、大伴家に身を寄せるまでの経緯が詠まれている。それによると、尼理願は新羅の国から、日本を「良し」とする人の噂だけを頼りにして来日を決意したことがわかる。尼理願にとって、日本とは「親族兄弟なき国」であり、拠り所のまるでない未知の地であった。来日後はどのような理由からか不明であるが、縁もゆかりもない「佐保の山辺」の大伴家に身

を寄せることになったと詠まれている。

当該歌の「泣く子なす」は、尼理願を「泣く子」に喩え、「慕ひ来まして」を修飾する。この「泣く子なす」については、早く『萬葉代匠記』（精撰本）に、「哭兒成慕來マシテトハ、若子ノ泣テ親ヲ慕ヒ來ル如クナリ。」とあり、親子の情に基づく表現であることが指摘されている。しかし、そのことは、これまで作品に即して説明されてこなかった。

当該歌は、詠み手が尼理願を「泣く子」に喩えることによって、全く縁故のなかった大伴家と尼理願との間に親子の関係を生じさせていることが重要である。

当該歌の「泣く子なす慕ひ来まして」は、「泣く子」が親を求め、必死に追ってくる様子を示している。「泣く子」とは、失った母親を求めて泣く子どものイメージに基づく表現であり、尼理願は、詠み手によってこの子どもに喩えられている。そして、このことは、母親のいない子どもが頼るべき唯一の存在として父親に必死にすがりつくように、尼理願が、大伴家を全面的に依存していたことを表現するものと考ええる。

また、尼理願を「泣く子」に喩えることは、大伴家を、母親のいない子どもが必死にすがりつかない父親の立場に立たせることとなる。子どもの視点から、頼るべき絶対的な存在として大伴家を詠むことは、詠み手の大伴家に対する讃美となるのではないだろうか。

当該歌に、「都しみみに里家はさにはあれども」とあるように、都には大伴家以外にも多くの家があったと詠まれている。その多くの家の中から、寄る辺ない異国の尼僧が、全面的に依

存する唯一の存在として大伴家を選び、身を寄せたと詠むことで、詠み手である大伴坂上郎女は大伴家を讃美するのである。

四 卷五・七九四番歌の「泣く子なす」について

日本挽歌一首

大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす
慕ひ来まして 息だにも いまだ休めず 年月も いまだ
あらねば 心ゆも 思はぬ間に うちなびき 臥やしぬれ
言はむすべ せむすべ知らに 石木をも 問ひ放け知らず
家ならば かたちはあらむを 恨めしき 妹の命の 我を
ばも いかにせよとか には鳥の 二人並び居 語らひし
心そむきて 家離ります

(⑤・七九四)

当該歌は、山上憶良が詠んだ旅人の妻への挽歌とされる。この歌には、大宰帥として大宰府に赴任する旅人に同道した旅人の妻が、臥せりがちになり、手の施しようもなく亡くなった経緯が詠まれている。旅人が都から「遠の朝廷」である大宰府に赴くということは、旅人の妻が、一人取り残されることを意味していよう。当該歌の「泣く子なす」は、「慕ひ来まして」を修飾し、旅人の妻がまるで泣きじゃくる子どものように、旅人に同道した事実を表現している。

この表現について伊藤博氏は、次のように述べている。

……だが、それは単なる同道ではない。「泣く子」のようになだをこねてむりやりに妻がついて来たのである。健康が思わしくないから家にいなさいと作主⁽¹⁾がいうものを、泣

きじやくる子のようにいうことをきかなかったのである。

伊藤氏の解釈は、当該歌を「家」と「旅」という対比による典型的な表現と捉えることに基づいている。そして、旅人の妻を「家」にいるべき存在だったと考え、それに従わなかったことから、この表現について「むりやりに」という意味で詠まれていると解釈している。また、この問題に関連して、鉄野昌弘氏は、伊藤氏の説を支持した上で、「泣く子なす慕ひ来まして」について、「……「泣く子なす」という譬喩は、同道してきたと言うより、勝手に後追いついてきたことをいうのに相応しいのではないか。」と述べている。鉄野氏の見解は、旅人の妻の同道を「勝手に後追いついてきたことをいう」と理解する点で、「泣く子なす」を伊藤氏の見解以上に詠み手の厳しい批評として読み取っている。しかし、両氏がいうような見方は正しいのだろうか。当該歌の「泣く子」とは、指摘されているような、ただっ子のイメージに基づくものではないように思われる。ここでの「泣く子」も、失った母親を求めて泣く子どもものイメージに基づいて、相手を母親を失った子どもが唯一頼ることのできる父親にみなし、全面的に依存していることを表現するものと考ええる。つまり、旅人の妻を「泣く子」に喩えることによって、旅人の妻の旅人に対する全面的な依存を表現しているのである。

このことを、被修飾語である「慕ひ来まして」からも見てみたい。この表現は、下接する「息だにもいまだ休めず」にかかっており、泣きながら懸命に親にすがりついて来た子どもの荒い息づかいが、同様に、旅人の妻の同道の必死さとして浮かび

上がってくる。さらに、当該歌の「慕ひ来まして」を受けて詠まれた表現として、当該歌の反歌である七九六番歌の「慕ひ来し」がある。

はしきよし　かくのみからに　慕ひ来し　妹が心の　すべ
もすべなき
(⑤・七九六)

この反歌において、詠み手は、第二句に「かくのみからに」とあるように、旅人の妻の同道が、彼女の死に結びついていたことを含みながらも、その行動を、「はしきよし」と詠み、いじらしく愛らしい行動として解釈している。つまり、当該歌と反歌における旅人の妻の「慕ひ来」という行動は、旅人に対する親愛の情から起こった、依存の行動として詠まれているのである。

以上のように、旅人の妻を「泣く子」に喩えることは、旅人の妻の旅人に対する全面的な依存を表現すると同時に、旅人を、母親のいない子どもが必死にすぎるしかない父親の立場に立たせることでもある。子どもの視点から、これを詠むことは、相手に対する讚美の表現でもあった。そのようにして、詠み手である憶良は、旅人を讚美したのである。

五 巻十五・三六二七番歌の「泣く子なす」について

物に属けて思ひを発す歌一首

朝されば　妹が手に巻く　鏡なす　三津の浜辺に　大船に
ま梶しじ貫き　韓国に　渡り行かむと　直向かふ　敏馬を
さして　潮待ちて　水脈引き行けば　沖辺には　白波高み

浦廻より 漕ぎて渡れば 我妹子に 淡路の島は 夕されば
雲居隠りぬ さ夜更けて 行くへを知らに 我が心
明石の浦に 船泊めて 浮き寝をしつつ わたつみの 沖
辺を見れば いざりする 海人の娘子は 舟乗り つらら
に浮けり 暁の 潮満ち来れば 葦辺には 鶴鳴き渡る
朝なぎに 船出をせむと 船人も 水手も声呼び には鳥
の なづさひ行けば 家島は 雲居に見えぬ 我が思へる
心とぐやと 早く来て 見むと思ひて 大船を 漕ぎ我が
行けば 沖つ波 高く立ち来ぬ 外の方に 見つつ過ぎ行
き 玉の浦に 船を留めて 浜辺より 浦磯を見つつ 泣
く子なす 音のみし泣かゆ 海神の 手巻の玉を 家づと
に 妹に遣らむと 拾ひ取り 袖には入れて 返し遣る
使ひなければ 持てれども 験をなみと また置きつるか
も (15・三六二七)

当該歌は、遣新羅使人の作である。「泣く子なす」は、「音のみし泣かゆ」を修飾し、詠み手が旅路にあって涙に暮れる様子を描写している。ここでは、遣新羅使人として難波の三津の浜を出航してからの道程を詠み、要所ごとに「妹」を連想する望郷歌である。このことは、すでに清水克彦氏が、「瀬戸内海西航の途上における道行的望郷歌で、地名も作者の望郷の心に連なる意になつてゐる」と指摘している。⁽¹⁵⁾ 清水氏の指摘を受けて、吉井巖氏は、当該歌についてさらに詳細に分析をしている。それによると、当該歌は「には鳥のなづさひ行けば家島は雲居に見えぬ」で前半と後半に分かれる二部構成となつており、前半部では、まだ畿内にあり、時間と共に家から遠く離れ

てゆく航海の第一日目における遣新羅使人たちの心情を、後半部では、第二日目の畿内から出て家に近づきえない距離からの心情世界が詠まれていると述べている。⁽¹⁶⁾ 清水・吉井両氏の指摘に従えば、当該歌の「泣く子なす」は、後半の第二日目の家に近づきえない距離からの心情世界を詠んでいる箇所にあたり、詠み手の望郷の念として詠まれている。

当該歌の「泣く子なす音のみし泣かゆ」について、吉井氏は、第一日目にあつた「海人娘子や鶴の声に心を向ける余裕」が、遣新羅使人から喪失した状態を表現したものだとして述べている。しかし、その「余裕」の喪失が、当該歌の主題でもある望郷とどのように結びついているのかについて明らかにしていない。また、江見澤氏も吉井氏の説を参考にした上で、この表現が、遣新羅使人が「官人としてあるまじき」「理性や秩序以前の状態」に陥つたことを示していると述べる。⁽¹⁷⁾ しかし、江見澤氏についても、「官人にあるまじき」状態と望郷との結びつきが十分に説明されていないように思われる。

当該歌の「泣く子なす音のみし泣かゆ」も、詠み手が失つた母親を求めてただ泣くばかりの子どもの姿に自分自身を喩え、そのように必死な思いで家にある「妹」を求めている望郷の表現として読み取る必要があるだろう。

このことは、当該歌の「泣く子なす」が、「玉の浦」という地名において詠まれていることも関連しているように思われる。改めて、当該歌の地名を追ってみると、「三津→淡路島→明石の浦→家島→玉の浦」となっており、難波の御津から倉敷市玉島あたりとされる「玉の浦」までの摂津・播磨・備前を経

て備中で停泊する道程となっている。⁽¹³⁾つまり、当該歌の「泣く子なす」は、「玉の浦」という都から最も遠い場所において詠まれていることになる。また、これ以降、「験をなみとまた置きつるかも」とあるように、詠み手は家郷に戻ることもかなわず「妹」への土産を集めることを諦めており、当該歌の「玉の浦」とは、家郷とのつながりを意識する境界的な地名として捉えることができる。このことから、当該歌の「泣く子なす」は、家郷を意識しうる最遠の地「玉の浦」において最高潮に達した、詠み手の望郷の念を表現しているのである。

さらに、この表現は、詠み手の「妹」に対する讚美でもある。繰り返しになるが、「泣く子なす」は、相手を母親のいない子どもに頼るべき唯一の存在である父親の立場に立たせる表現でもある。当該歌においても、詠み手が自らを「泣く子」に喩えることで、「妹」への全面的な依存を詠み、子どもの視点から頼るべき唯一の存在と位置づけることで、「妹」への讚美を表現していると考えるのである。

六 卷十三・三三三六番歌の「泣く子なす」について

鳥が音の かしまの海に 高山を 隔てになして 沖つ藻を 枕になし 蛾羽の衣だに着ずに いさなとり 海の浜辺に うらもなく 臥したる人は 母父に 愛子にかあらむ 若草の 妻かありけむ 思ほしき 言伝てむやと 家問へば 家をも告らず 名を問へど 名だにも告らず 泣く子なす 言だに問はず 思へども 悲しきものは 世の

中にそある 世の中にそある ⁽¹³⁾・三三三六

当該歌は、卷十三の「挽歌」に所収され、海辺において行き倒れた旅人に向けて詠まれた行路死人歌である。「鳥が音の」から「臥したる人」までは死者の死に様を詠み、その死に様を、詠み手が死者の父母や妻に伝えようと「家」や「名」を問いかけるけれども死者は言葉を発することなく、詠み手の悲しみを誘うのである。すでに、古橋信孝氏によって、当該歌の「家」や「名」を問いかける表現が、詠み手の行路死人に対する「共感」の表現として死者の鎮魂の役割を果たしていることが指摘されている。⁽¹⁴⁾当該歌の「泣く子なす」は、他の行路死人歌には見られない表現であるが、詠み手の「共感」と深く関わっているものと考ええる。

当該歌の「泣く子なす」は「言だに問はず」を修飾する。この「言だに問はず」とは、生者である「泣く子」のありようであるとともに、死者である行路死人のありようでもある。これまで、当該歌におけるこの表現は、全く説明されないか、泣きわめくばかりで言葉の通じない「不具」の神々の神話から「言語不通」という意味で捉えられてきた。⁽¹⁵⁾しかし、当該歌の「言だに問はず」の意味を確認すると、そのような意味では用いられていないようである。詳しく見てみると、当該歌の「言だに問はず」の「問はず（原文 不レ語）」には訓の異同があり、「トハズ」の他に「ツゲズ」「イハズ」が見られる。このことから、『万葉集』における「トハズ」「ツゲズ」「イハズ」の例を確認すると、いずれの例においても言語能力がなく話すことができないというような意味ではなく、「言葉を交わすことなく」

という意味で用いられている。つまり、当該歌の「泣く子なす言だに問はず」とは、対象は死者であるが、失った母親を求めて泣きじゃくっているために、円滑にコミュニケーションがはかれない状態の子どもに喩えられている。そして、そのような喩えることによって、詠み手は、行路死人を共同体に戻れることを切に願う存在として表現し、行路死人への「共感」を示しているのである。

ところが、当該歌の「泣く子なす」では、行路死人を「泣く子」に喩えることによって、詠み手自身が父親の立場に立つことになる。先に見た、防人歌の父親がそうであったように、「泣く子」とは、父親にとって受け入れられようにも受け入れられない対象であった。詠み手は、行路死人を「泣く子」に喩えることによって、共同体を切に求める行路死人を表現し、「共感」を示しているが、その思いに反して、行路死人は問いかけに応じることはしない。共同体に伝えようにも手立てのない詠み手には、そのような行路死人になすすべもなく、そのことが、結局に示された詠み手の無常観や悲しみに結びついたものと考えるのである。

七 卷十三・三三〇二番歌の「泣く子なす」について

紀伊の国の 室の江の辺に 千年に 障ることなく 万代に かくしもあらむと 大船の 思ひ頼みて 出立の 清き渚に 朝なぎに 来寄る深海松の 夕なぎに 来寄る繩のり 深海松の 深めし児らを 縄のりの 引けば絶ゆと

や 里人の 行きの集ひに 泣く子なす 行き取り探り
梓弓 弓腹振り起し しのぎ羽を 二つ手挟み 放ちけむ
人し悔しも 恋ふらく思へば

右一首 (13・3302)

当該歌は、卷十三の「相聞」に収められた一首である。その大意は、詠み手と愛する女性が「人」に引き離された嘆きを詠んだものといえる。具体的に見てみると、この歌の内容は、大きく二つに分けることができる。前半は、初句から「深めし児らを」において、詠み手と「児ら」と称される女性との間で愛情が深く確かめあわれたことが詠まれ、後半では、「里人の行きの集ひ」が「行き取り探り」及び「放ちけむ」にかかっていることから、「里人」の集まる場所、詠み手と女性との仲が引き離されたことが詠まれている。

後半部に出てくる当該歌の「泣く子なす」には、そもそも、その被修飾語に諸説あり、これを整理すると、大きく五つの説がある。本稿は、その中で、下接する句、つまり当該歌では「行き取り探り」を被修飾語とする説に従いたい。というのも、これまで見てきたいずれの「泣く子なす」も、下接する句を修飾していたからである。この「行き取り探り」を被修飾語とする説を掲げる『万葉集注釈』（以後、「注釈」）は、次のように述べている。

「泣く子なす」は枕詞。ここは「はひ行きものを取りさぐる」の意でつづけた。「行」の文字を用ゐたのもそのかかりの意を示したもので、上の「行」と同音をかさね、叙を取りさぐつて、と云つたのである。

「泣く子なす」の被修飾語については、『注釈』の見解に従う。ただ、『注釈』が「行」に「轍」がかかる点について、『注釈』以外にこの説を掲げる、新編日本古典文学全集『萬葉集』（以後、『新全集』）及び『萬葉集釋注』（以後、『釋注』）では、原文「行取左具利」に従い、「行」を掛詞とは見ていない。詳細な検討は省くが、本稿も原文に従うことにする。

また、「行き取り探り」について、『注釈』が示す「はひ行きも、のを取りさぐる（傍点筆者）」という理解はこれまでの検討から疑問が残る。このことについて、『新全集』では「親を探して泣く迷子のように取り乱して」、「釋注」では「幼児が母の乳をまさぐり探す意であろう」というように、親子の關係に基づいて詠み手と女性との仲を裂いた「人」を「泣く子」に喩えて解釈している。つまり、「泣く子なす行き取り探り」とは、「里人」が行き集う場所で、子どもが泣きわめきながら親を探し求めるように、詠み手の愛する女性を「人」が探し当てたことを表現しているとする。これは、本稿がこれまで検討してきたこととも合致しており賛同したい。しかし、例えば『釋注』が、これについて「つまり、この男の妻は、里人の行き集う人ごみの中で、突如誰かにさらわれてしまったのだと思う。」というように、夫婦を暴力的に引き離してしまう民俗や事件性を孕んだ表現とする解釈は、「泣く子」を親子の關係に基づく表現であるとする十分な説明になっていないように思われる。

当該歌の「泣く子なす行き取り探り」は、「人」を子どもが泣きながら母親を探し回る姿に喩える表現である。そして、そのようにして詠み手が愛する女性を探り当てられたことと、結

句の「人し悔しも 恋ふらく思へば」の結びつきに注目する必要がある。

ところで、詠み手と女性は、どのような關係にあったのだろうか。というのも、「放ちけむ」とあり、女性と引き離されたという過去の事実に対して推量の表現が用いられているからである。つまり、事態は詠み手の知らないうちに起き、今もなお推量の域を出ないこととして詠まれている。すると、二人は夫婦ではなく、まだ公には知られていない關係であり、「里人の行きの集ひ」には、女性だけが出かけたと考えた方が自然であるように思われる。

ここで、この二人を引き裂く場となった「里人の行きの集ひ」という空間について考えてみたい。『万葉集』における恋の歌に詠まれた「里人」の用例を見ると、次のような歌が見られる。

里人の 言寄せ妻を 荒垣の外にや我が見む 憎くあらなくに (11・二五六二)

里人も 語り繼ぐがね よしゑやし 恋ひても死なむ 誰が名ならめや (12・二八七三)

大船を 舳ゆも鰻ゆも 堅めてし 許曾の里人 頭はさめかも (14・三五五九)

うちはへて 思ひし小野は 遠からぬ その里人の 標結ふと…… (13・三二七二)

二五六二番歌における「里人」は、「妻」と詠み手との關係を口さがなく噂する人々として詠まれている。二八七三番歌では、詠み手が恋死にすれば、「里人」が、表に出ていない女性

の名を明るみに曝しながら噂を広めていくであろうと詠む。また、三五五九番歌では、強く誓い合った恋人の仲を「里人」にさとられないようにとの決意が見て取れる。さらに、三二七二番歌では、「里人」が詠み手の恋の対象者と同じ共同体にいて、想い人を先に得てしまいかねない人物として詠まれていることがわかる。

このように「里人」の用例を見ると、共同体的な集団を指す場合と共同体の内部にいる人物を指す場合とがあるが、いずれの場合も、不特定な人物を指している。また、「里人」は、恋人の仲を噂し明るみに曝してしまう存在であり、詠み手の想い人の身近な恋の対象者として詠まれているのである。

以上のことから、当該歌の「里人の行きの集ひ」とは、不特定の人が集まり、男女の仲を噂によって明るみに曝し広めてしまう危険な空間であり、そこには、恋を求めてうろつくような「人」もいたのではないか。そのような空間に、詠み手の知らぬ間に愛する女性が出かけ、誰ともつかぬ「人」に恋の対象とされてしまったものと考ええる。

ここで、再び、当該歌の「泣く子なす行き取り探り」を見てみたい。この表現は、「人」がうろつき回りながら偶然にも女性を探り当てた事態を示していた。この「人」とは不特定の誰とも解らない人物であり、詠み手は、この人物を「泣く子」に喩えることによって、父親の視点に立つて、防人の歌や前章の行路死人の歌と同様に、この事態に対するなすすべの無さを表現している。つまり、「泣く子には勝てない」というような一種の諦めが、当該歌の「泣く子なす」には含まれているものと

考える。そして、そのことは結句「人し悔しも 恋ふらく思へば」に込められた詠み手の無念さにも結びついているのである。

八 おわりに

これまで、『万葉集』の「泣く子なす」について、「泣く子」の表現から見てきた。『万葉集』の「泣く子」は、神話における神々の涕泣の挿話を想起させるが、神々の涕泣が持つ特殊性を受け継ぐ表現ではなく、母親不在の子どもと父親という特異な親子関係から、失った母親を求める子どもイメージに基づく表現であった。このことは、『万葉集』における「泣く子なす」の表現が、「泣く」行為そのものよりも、親子の関係から見た子どもを意識していたことを裏付けている。こうした「泣く子」のイメージをもとに、挽歌や望郷歌などの歌に詠まれた大人の行動を「泣く子」に喩える「泣く子なす」という比喩表現について、従来とは異なる提案ができたかと思う。

「泣く子」に喩えるとは、結局、不在の母親を求める子どものように相手を必死に求める表現なのである。それは、各作品の詠み手の視点によって、求められた相手に対する詠み手の讚美の表現にもなり、一方で、「泣く子」を受け入れきれない父親の視点に立つ詠み手の無念や無常感とも結びつく表現であった。

『万葉集』には、この他にも「泣く子なす」のように親と子の関係に基づく表現が見られる。今後、他の同時代の文献にお

ける親子のあり方なども視野に入れつつ、『万葉集』における親と子の関係に基づく表現と、それらの歌についても考察を深めていきたい。

注(1) 「泣く子なす」の表記は、「哭兒成」(③・四六〇)、「泣子那須」(⑤・七九四)、「鳴兒成」(⑬・三三〇二)、「哭兒如」(⑬・三三三六)、「奈久古奈須」(⑬・三六二七)とそれぞれ異なるが、今日いずれも「ナクコナス」と訓まれており、本稿も従来訓に従って稿を進める。

(2) 「泣く子なす」は、『日本書紀』『古事記』『風土記』など『万葉集』と同時代の文献には見られず、『万葉集』以外では、『八十浦之玉』『鈴屋集』『うけらが花』『藤簍』といった、江戸期の和歌集や歌文集に散見する。

(3) 「なす」の研究は、語源研究に基づいており、「似す」説は、日本古典文学大系『萬葉集』一 補注(331頁)や『新明解古語辞典 補注版』『なす』項補注(西宮一氏執筆)、また、「成す」説は、澤瀉久孝『萬葉集注釈』第一巻(199頁)や土橋寛氏『古代歌謡全注釈 古事記編』(189頁・190頁)、さらに、格助詞「な」+形式動詞「す」説は、山田孝雄『奈良朝文法史』(549頁・550頁)に詳しい。語源説に定説はないが、用法を帰納的に見て、「なす」に比喩関係を示す機能のあることは明らかだと指摘されている(半澤幹一「万葉比喩論序説―直喩の認定と表現形式―」(『共立女子大文芸学部紀要』二八集 一九八二・二)。また、近藤信義「古代の鏡と枕詞の世界―「鏡なす」の原風景」(『立正大学大学院紀要』十五号 一九九三・三)も参

考にした。

(4) 江見澤洋祐「枕詞「泣く兒なす」の位相」(『大学院年報』二八号 二〇〇一・三)

(5) 江見澤氏のいう「泣く兒」とは、大人と子どもの関係に基づいて用いているが、本稿は、親子の情に基づく表現として「泣く子」を扱うため、江見澤氏のいう「泣く兒」についてはそのまま引用し、本稿は、区別して「泣く子」と表記する。

(6) 江見澤氏は、「言だに間はず」「音のみし泣く」「行き取り探り」を「泣く兒」の古代性や表現の累積から捉えられる「表現とし、「慕ひ来ます」の二例をそれ以外の表現として、「泣く子なす」の「位相」を説明する。

(7) 山田永「泣くこと」(『上代文学』六四号 一九九〇・四)

(8) 「萬葉集全註釋」(以後、「全註釋」)が、「コラは、妻とも子とも解せられるが、この歌の場合は、五句に、母無シニシテと言っているのだから、子どものことであろう。」と指摘しているのに従う。

(9) 「万葉集」の「泣く子」に該当する用例は三例あるが、そのうち、二例は比喩的な用例であるため、注で紹介する。

まず、巻四・四九二番歌の「衣手に 取りとどこほり泣く子にもまされる我を 置きていかにせむ 舍人吉年」で、吉年は、「泣く子」を持ち出すことで大宰府に赴く田部忌寸櫛子との別れ難さを表現している。当該歌の「泣く子」も、失った母親を求めて泣く子どものイメージに基づいており、男女の恋を詠むにあたっても、相手を、

失った子どもが頼るべき唯一の存在として捉えることによつて、櫛子に対する讚美の表現となつていているものと考ええる。また、卷十三・三三二番歌の「泣く子守る山」は、検討するべき点が多いため、拙稿「泣く子守る山」考―『万葉集』卷十三・三三二番歌をめぐって―（『都大論究』四一号 二〇〇四・六）で検討し、親と子の情に基づく表現であることを論じた。詳細は、拙稿を参照していただきたい。

(10) 四六一番歌左注には、「右、新羅国の尼、名を理願といふ。遠く王徳に感けて、聖朝に帰化しぬ。時に大納言大將軍大伴卿の家に寄住して、すでに数紀を経たり。（後略）」とある。なお、「大納言大將軍大伴卿」については、『続日本紀』和銅七年五月丁亥朔条に、「大納言兼大將軍正三位大伴宿禰安麻呂薨しぬ。」の記事が見られる。

(11) 「日本挽歌」の「妹」が憶良の妻と旅人の妻のどちらであるかについては、長く論争されているところであるが、今日旅人の妻の死を憶良が悼み、歌を献上したとする伊藤博氏（『万葉集の歌人と作品』下 八章四節）の説に従うことにする。また、井村哲夫『萬葉集全注』第五卷【考】も参考にした。

(12) 伊藤博『萬葉集の表現と方法』下 第八章第二節「家と旅」（塙書房 一九七六・十）

(13) 引用部の「作主」という言葉について、伊藤博氏は、（注12）前掲書において、「日本挽歌」の妻の対象者に諸説あることを考慮した上で、「作中主人公の意で「作主」という語を用いる」と述べている。

(14) 鉄野昌弘『日本挽歌』（『セミナー万葉の歌人と作品』第

五集 和泉書院 二〇〇・九）

(15) 清水克彦『萬葉論集』第二「丹比笠麻呂の道行的望郷歌―赤人作歌との関係を中心に」（桜楓社 一九八〇・五）

(16) 吉井巖『萬葉集全注』第十五卷

(17) 江見澤（注4）前掲論文。

(18) 当該歌の道程の記述は、主に『釋注』を参考にした。

(19) 古橋信孝「万葉短歌の表現構造―行路死人歌の場合」（『国語と国文学』五九―九 一九八二・九）

(20) 江見澤（注4）前掲論文。

(21) 「トハズ」は、『萬葉集』（日本古典文学大系・日本古典文学集成・新編日本古典文学全集・新日本古典文学大系）、「ツゲズ」は、『萬葉集』（おうふう 一九九六・三重版）、「イハズ」は、『全註釋』で訓まれている。

(22) 当該歌の文脈整理には、高橋庄次『万葉集卷十三の研究』（桜楓社 一九八二・五）なども参考にした。

(23) 当該歌の「泣く子なす」の被修飾語については、大別して五説ある。

①「行き取り探り」を修飾するとする説。『全釈』・『注釈』・新編日本古典文学全集『萬葉集』・『釋注』

②脱落句があるとする説。『万葉考』

③「放つ」を修飾するとする説。『萬葉集私注』

④「取り探り」を修飾するとする説。『萬葉集総釈』

⑤「探り」を修飾するとする説。新日本古典文学大系『萬葉集』

本文に記したとおり、本稿は①説を支持する。

(24) 『釋注』の他に、事件性を孕む解釈として、村瀬憲夫氏が「万葉集卷十三の長歌の実態―里人の我に告ぐらく」

歌の原初形態の想定をめぐって」(『シュンボシオン』2
一九九七・三)の中で、続く三三〇三番歌の挽歌性と連な
ることを前提に、「娘子」の死と結びつく「拉致」として
解釈している。

※本稿は、新編日本古典文学全集『万葉集』(小学館)をテキス
トとして使用した。

※※『古事記』の本文は、日本古典文学大系『古事記』(岩波書
店)から引用した。なお、旧字は、新字に改めた。

付記

本稿は、二〇〇三年三月一日における古代文学会三月例会で
の口頭発表に関連している。席上、多くの貴重なご教示をいた
だいたことに感謝申し上げます。

また、本稿を書くにあたり、指導教官である飯田勇氏との相
談の中で、貴重なご意見をいただき、「泣く子」の解釈に多く
の手がかりを得た。この場を借りてお礼申し上げます。